楊洲周延筆

品川御殿

下のまき

上のまき

明良二葉州六編

万亭應賀作

澤村扳

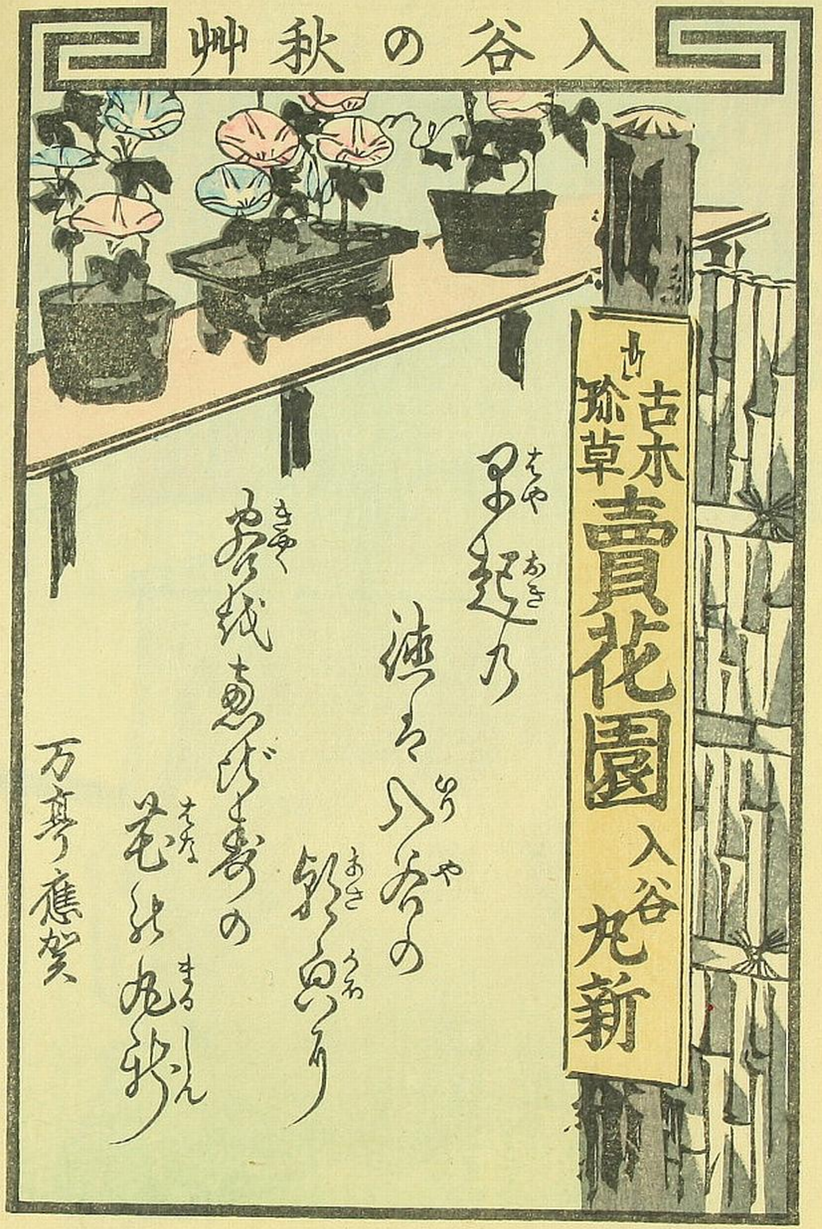
明良二葉艸六編

万亭應賀作

上のまき

H623
11

入谷の秋艸


古木孫草
賣花園
入谷丸新
万亭應賀

明良二葉艸六編

上の巻

一 竹千代君旅立の局を夢に見ゆる事
一 南蠻國より渡りてる莨茗御制禁にある事
一 春日の局の兵法をお次女中物ゆくる事
一 国千代君の御伽衆酪酊の退出に放逸ある事
一 於末女中富士越龍を見る事
一 大姥の方竹千代君の御機嫌伺に出る心切の事

下の巻

一 国千代君の御部屋の御押権威をふる事
一 春日の局の御押身の上戒易者に見てもらふ事
一 春日の局御門入に不思議ある事
一 土井大炊頭若君の御弘を江府君へ提しゆふ事
一 酒井雅楽頭青山伯耆守老君の物語を君へ言上する事
一 駿府より江戸へ急に御下向の注進来る事

万亭應賀誌

48-7675

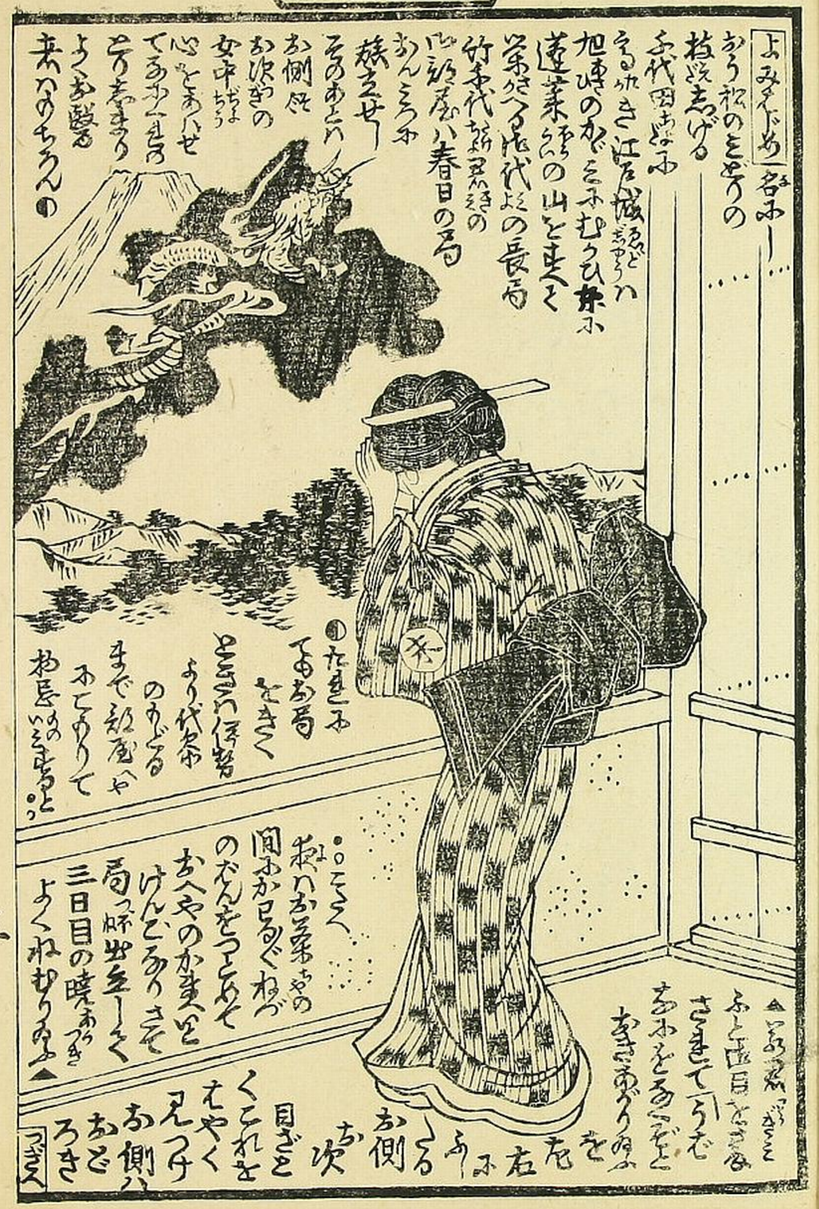
土井大炊頭利勝

此候ハ源頼光朝臣の後胤土岐の
庶流土井遠江守
貞秀の末孫小左
エ門利昌の嫡男にて
徳川三代に勲功多くいるを
以て從四位少將に
任じて加判をゆるされ
始て大老を務らる竹千代君
御傅三候の一賢士あり

駿府大奥花女

此女子ハ幼年より容貌艶しく
手跡を美事に
なしてめ琴を能ひきければ
名成花と下さ
れて大御所の
御手元に勤め
あげ
茶の湯に
委しきゆゑ御園の
事を一切是に任せ

らる駿府第一の美人あり



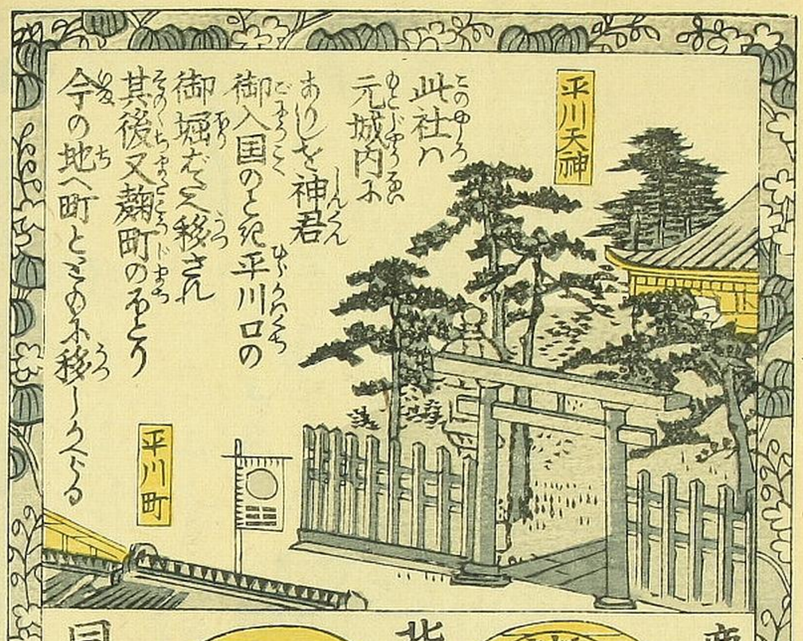
平川天神

此社ハ元城内ニ
ありしを神君
御入国のとき平川口の
御堀だへ移され
其後又麹町のあとり
今の地へ町とさのに移しかくる

平川町

慶長江戸座小判　量目四匁八分

背



同一分判

加補

量目一匁二分

つぎ

「ハテ君きいやあそばせ」とさきの男が「ごりやうさんぐらゐなをそれお世のいとみごひをせとのさまうようお側のハッとおさまりてあーげそのいろ〳〵

「コハ
なしろ
うれ

■ごひをつさんそをとめあそばごろ

■ことをせきばあそばなまそばやお相手のいとみごひをせとのさまうようお側のハッとおさまりてあーげそのいろ〳〵

水

■せつかくごやアノ鳥〳〵ものあくことをいさまいきうぶをのこるおハッカッのはとーおそるのあくねまで不自んのつをせらうとせちとごとを

左ノ文

ねぐをこまく出まぶ〳〵ん
き日のつとあおそくらべそをけのおもとらんさまぶ〳〵ようあさく早やくくおるいよとのぶ〳〵ぶぐきてくをさんとのさまふようお側いろことびコレいまさいとうおわせかる私どもい

うでがおそだおあさねをさむーくおそだおへそのやうお出の夏おをごろんあそだなをとのぶるおづひでお沢女中「おあこうぐちまとーのうちおそだおあくねこでさみでおあさ到くとのあふあお側も私くはもおそばおあさびよるとそでもちんやさく今私をこぎよん。

竹千代君

あれと出力をつくまびコハおおをいふをちこちろ式やうおつきそひいるおうおろあ〳〵知とそれをさむくよのべをとくあまとコよ

あ茶山のあそだの鳥おさ新あくはをとうぐぶそ日ひのつとおおひのつと

右ノ文

側

うたがさぐ※

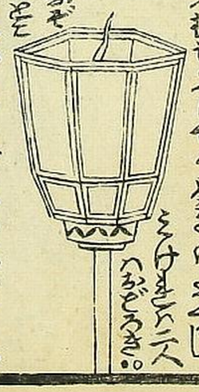
※まつさびさぐにしよろこぐんさびコとおばきおわしおくをあげよといふようお沢へ

つぎ　お次は花ごよみ
　　ゆかりの詞をとうくろひそ
「それかひごろおもものおもひ
　めーよりねごのごとく（イヤ〜）○

○ことがみ　のくめのの
いとをるうぢるもび
これをあてゝてそよ
こまといかくてうお祝い
いわまごもうだかさそ
さむらゝんとの旅立
おさてにお局つぼみの旅立
ぶちとごそんじるうとこちひ▼

▼ごがト仁ぜんぶとまゝませて
まこのごとくにれおそまく
らせけるさて五日めの祝ひ
お三の間とお仲居ゐが
ねづのぞんやあくれが
仁菜ぎやの百ふ夫のの
こくようつめて祝ひけの

図南蛮園ごくようはめて
こそうくる甘良若ごとくは
りのおりこまにつは花なこと
は仁居首ごくふかつめてけごろを
吸ふきせることいよりのおりこの
ごなことといよりのめにけやうお
象のふさごくときふのめび緑が
ひらひてむねぜせのくとちる
りの内お局ぶのおるをきい
ごといろぶくせろてごろんときを
るふつめいをつけてそそ〜けごび
おまへそのめブレきりのとあん
べんもあくひ吸ふ〜けれごそ
けむりのんどふいるやいあ夫供ふ
ふむせくりそうやきごくし
こけまこ二人へおごろき。



ごを
ふくさぎぎ
まているを
ろくやうきごろは茶くさく

図なだちお茶けうごうをあけて
いるところくろのおまは女中ひそふ
きてるをお仲居いうるよう「これ
よのところくおいでさはせうぐも
お側をちろきおるとそでうろう
あきあこまのいばばぢのそそを
るくとおそる「おきをとよびれ
けまいお三のる「はどろいさぞごさん
ろうさうぶろいお局つぼみのまだ
がりうとあぐ乱「いねびひ
てもうあいいめでよいと
ゆくおいお仕事せつをを

◆あさいうとまうくん叔のおるまで
あんぞよきおごさまでもあまがの
ヨてれ〜よいのをうちけておいと
おうろくの石根よまり「下色ひとうろ
いぐ〜てうひろげ「乱ろ返年根日外へ図

◆おろいおうくおぐて「ものこまつきみきさんぐてふ「きさ

つゞき ごいけんいたさんとぞんじまする
そのまゝとりつゞいたものゝ
のべごとうくだいあくびけるおもしろさ
おもしろさ
つゞく毒くちまるりのおさまりもの
十四日七月十四日延をさもしくは制禁
夫くへもさうけるお前のおさづかて
きせるやうにおこゝろをやうおもしろ
まをかれひ〳〵お神花ろくへおやせうにおり
おそれどもそのせずそくへにおきと
夏方ろくおもしろ

仲

やりて 呼出し
おりきとゞお行ゝ
のおりとりばん
夏もおもしろ
がく今うつてあ
おゝのおるやう
をうきとこそれらの
上もやぶとのうの

佐原与
さうのまゝ
おもしろ
おもしろ
ときき兵法
の三密ひの一術
隠形
掃竹さん

※ふうをまうふ歩行
しそ夫おの隠形
もきおうにとあ
つげうにとあ
うるう今
代術
をつて
まる
とき
城
の出入
ねこもれ
乱
のさ
今
阿代
でのこと
名
今御口
もいで

冬

▲こんやはじめてのあいさつ▲

ろばしをあけがくきことて
あのひのくれのけんかばを
ぎりもとくとうまでこのさをする
ものとうくおとさまよふ
ようきをとうとうそくをまた
ところくとうまでもとも
そのこうのおもてやうて

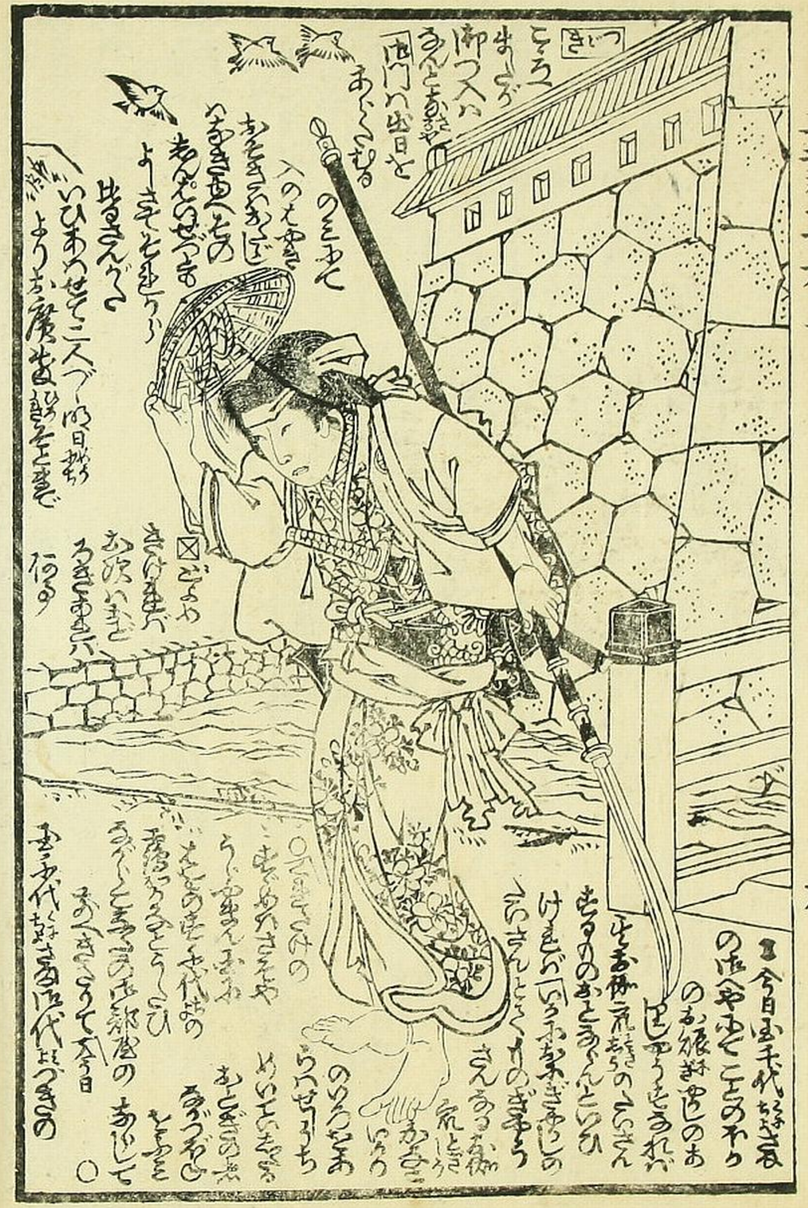
先ずまことあらぶり
かこうの※

侍
戻
ありがたき
二十日よりあるふ
それまで七日ふ
ありがたき
さいることありて
ようにとこそ
よとおせのおまく
いひきけおくへしとあり
つてくけれ
おまへことも
そのて

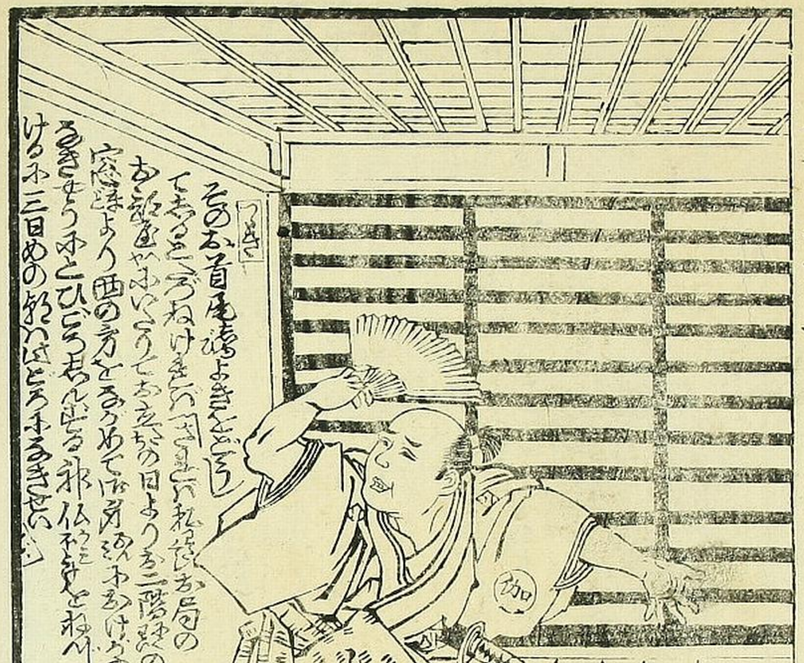
次

❶今うぐん
あひけと
ありて
おせと
のそる
こともよひまはる
さんぐくへもおとそる
まらうとことあまびう
そまとをおうそをまうそ

お角様
さうの
勢ある
側なと私
〈耳清ふはふいひ



國千代君



そのお首尾鳴よきをどうぞ
てまつるこゝろねけさいさい
お祝宴やおいくうてお元ちの日よの
宵ほよう西の方をみやでは月
うきをうみとひごろ君ぶる神仏
けるホ三日めの初ばとうまるきを
いへば月のかゝ
らもまう祝ひの
ごときいさやかみそ
きるこゝろうち
のこゝろ
山中ちかくさそるとゆりまくらに
あのうち」さるひきくむとをいくうにも
ゆくこまでもお供いたしませんおねがけ
そのくろくもちまちを見てえのごとく
のせいてんにうまれ出るもの中うれし
祝ひとりよりのいきそひうく旨
士ひのそをとてこゝろえおきて
きうし昔ようふ
その祝ひ曲よ
うきさ
いくうと

てんで留主ちの山もみおろす
おこぶけるあくさぐらてけさい箱
根山やおくあがりのおぶんおそくも
めくともうきい小春なのをうその。

女 うゝらさいあいまあいせのてそもりひるづくあそをぐめいけうち。

伽 そのお目出たうをそらせ俄かおつまもとをるづせつごさきあまくくもびこり雷あうえの青ちょうトッかまうふさこへ

伽 おゝ祝ひのかたちをうつてようこびのくといさぎよくうけまびるいあ末の新かとうづめてさまもくそまくいうそぐちとおも

伽 ❶飛ちある
おるきちをうつてようこびのくといさぎよくうけまびるいあ末の新かとうづめて「さまもくそまくいうそぐちとおも

のとそぐとくもあ間あさそるくかくちふさうそふさうきかけずとも

大姥の方
春日局

竹千代君
楊洲周延画

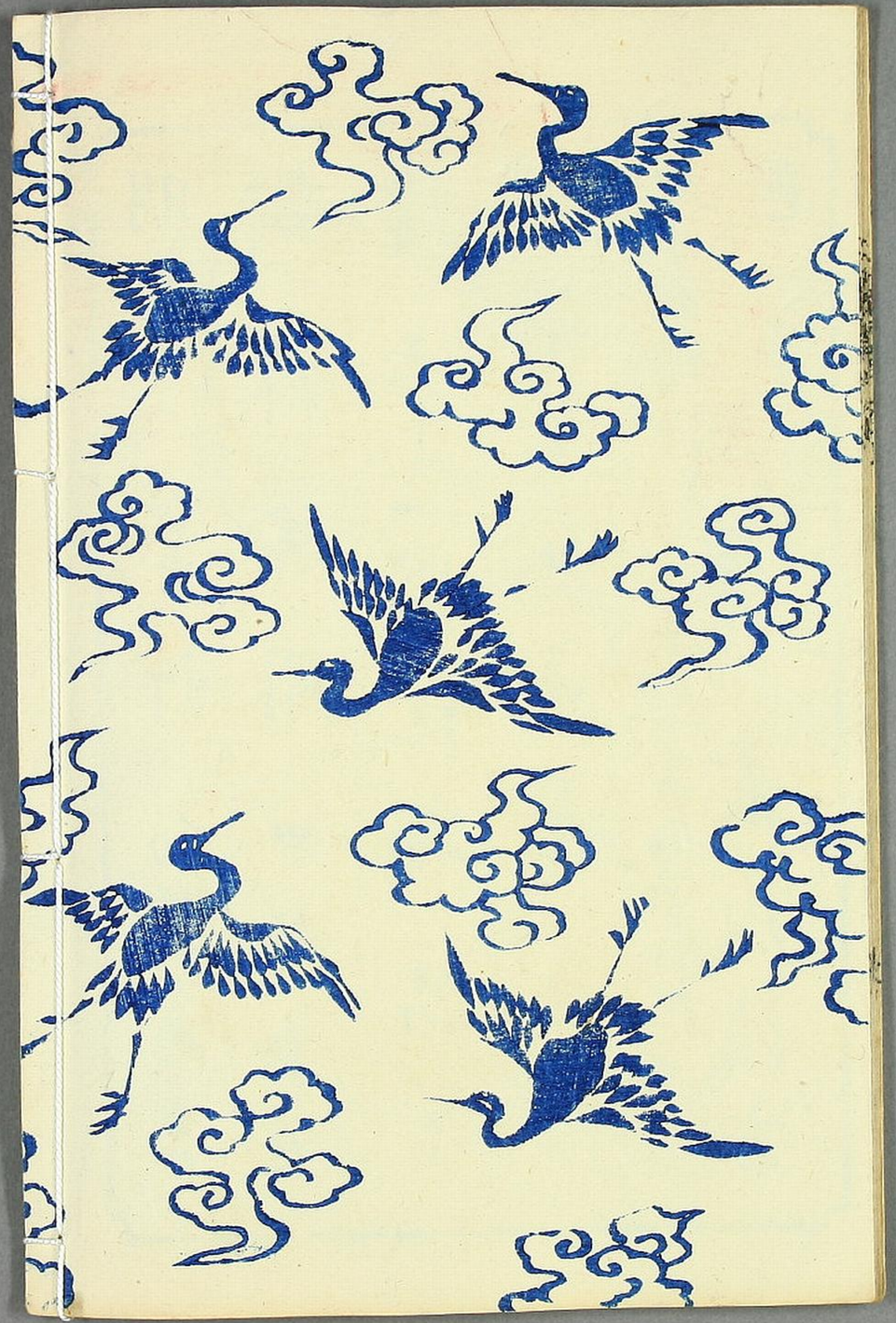
つゞき
あさせし柿きとさしいでせば「そまれ
よふこそ心ぞふかけらまとその柿きを
しづさくて出前せんへいで出生おさを改あて
「見れへ出きこそあまとのふふあらぐひ
「大姥おうぢひ」やよくこそ今日はめづしき

「ふさうじけるとのくまえ
ば「見れへごあんじまうせし
よりはすこ知ふて何なよりめ
でたくあんたんせりまゝあるく
はきげんをうぐひしせろ
まいのお伽咄とぎ道のうちを
はきうきくださまへう知
いまづはいとあとひき
とめあふはまゝをのじ
て出現へ取り詞柱をひそめて
お側そおむうひ「春日がほどの
いごぢよさいもあるまひが大夏
ふるまの代象ざいもどり
ぎさにふつがうなきやうにつゝ
ゐとものになまてるたんせろ
とそまとなくいひおきて
ふ本代君の
出新屋のうへゆられける

應賀作

明良二葉艸　初編ヨリ追ゝ出板
朝鮮異聞　四冊讀切
繪本一代紀物　品〻
上等色入小本　品〻
地本錦繪團扇
問屋　東京日本橋区本銀町二丁目角
武川清吉

010190515570



楊洲周延筆

品川御殿

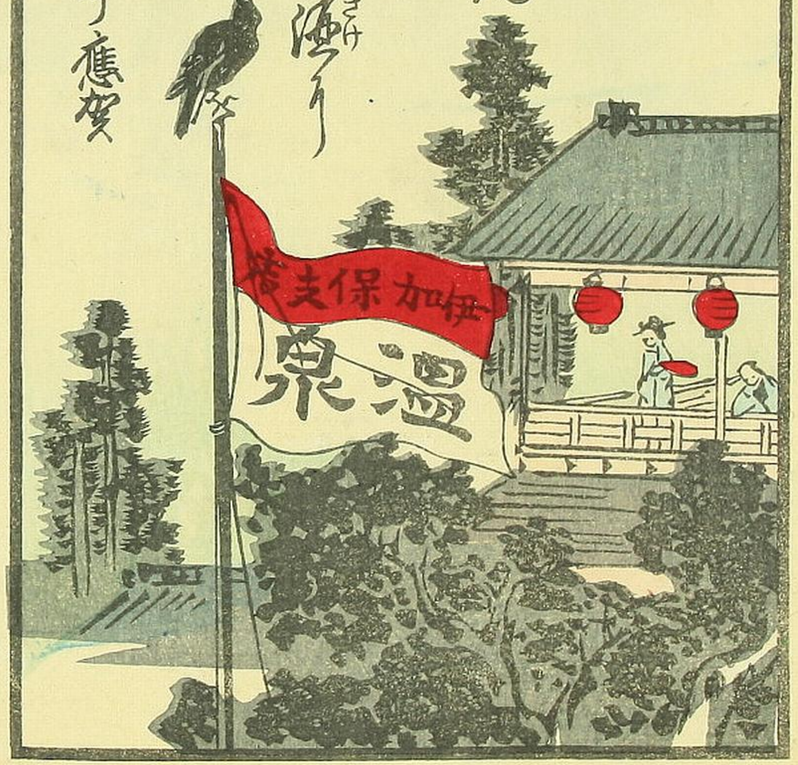
澤村扳

A623
12

根岸鶯溪の景

伊加保どの
疾も
ぬきん
肥くゝ青葉
湯より酒り
鶯の聲

万亭應賀



六編下

48-7676

つぎ
女中も
いせいをまして竹千代君の
女中をあるがあしかんてこせば
此女中につきまでかに捍でさいまでも
けんいをあつて此つの出入をいて
ゐるさて春日の局の此捍にお局の
旅立せられしをあらずいたりしに
其の日めに仲間縁の此捍に及ぶつて
もきあいければ其此捍局の此捍をかく
▲あゆうくつ見
あてんとせしが
よくもこころづきてかくるくく
よけたりしに其女中につきし
此捍ものおもいたずみあらく
つきたをしてもくをつれば
竹千代君の女中の此捍もく
おきよりたせ也にてそれを
あるのをきて
まつてそれが
くちおしひとや
らにて
出奔なり
せられしと

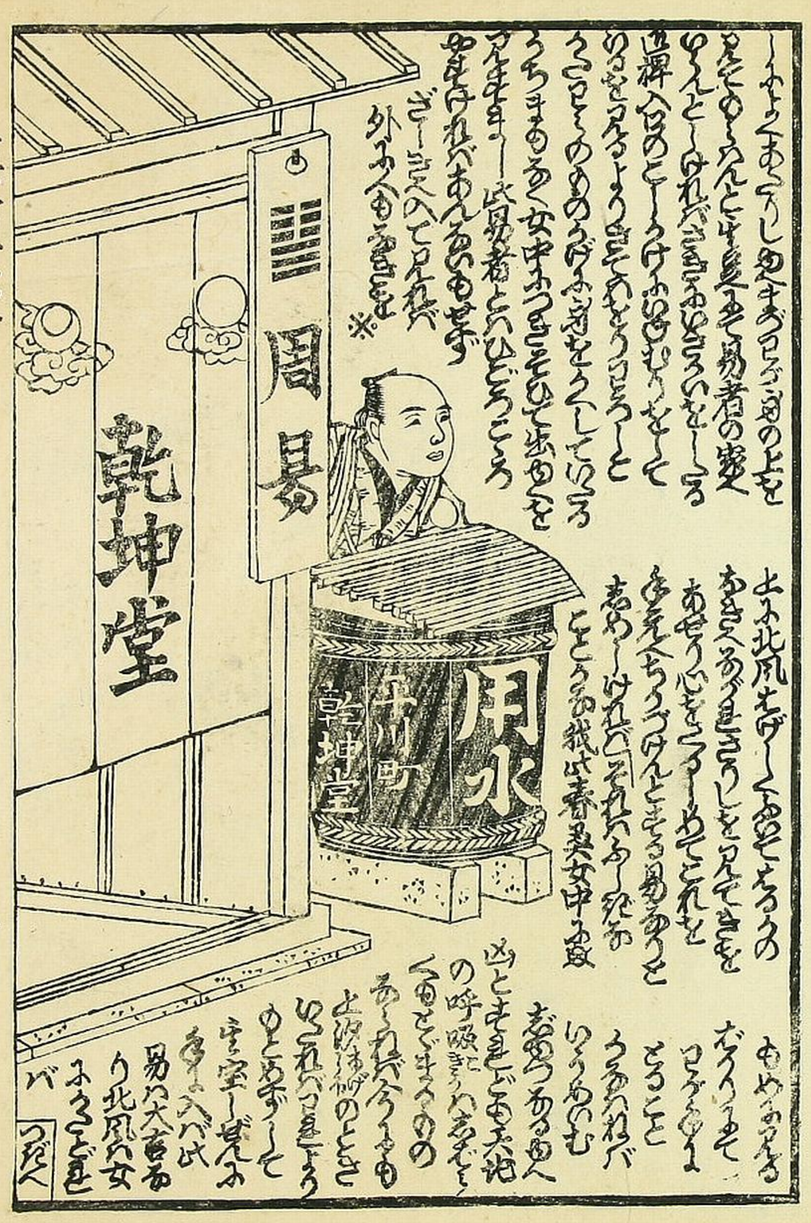
そがわけ是ば「そちにひるひあらんに
つきあらるあきめくことおもへば
若君の◎
さえあらぬ
ふちえあれのまぎれ
者にて此つへそのるいられ
やあると
ゆつ
くる
うきに
てうち
こくを
うたと
らの
こしら
けに
此つ
入を
まつ「咲く」
◎此用にて
此門出をあさる
女中につきあらしをも
つんのがしてやりしをありがたくは
▲
そうそうまことをよくきてこでさんと
其此捍にはうまでそれよりまだ
乃をいてぎ此切まつをいんとまる
ときに此つのうちより いでる女中に
ねけまいりをせられしといふが
あにもへにお借をせねとこぶ
ねれば「さまだそのうつさを
つまもとくよりきてしが
大奥の女中にるものが
此捍をつれずに化り
あざることにあき
こともへあにものつ
つがごんあのはつ
うりをそれんでそのやうあ
つるくちをこそるときてあげ
ていたりしがそこそまがまと
とあらつれとそうりしてにあら
まれ也へ今よりお廣敷へもき
お祝屋の女中をよびいでして
うそうまことをよくきてこでさんと
其此捍にはうまでそれよりまだ
乃をいてぎ此切まつをいんとまる
ときに此つのうちより いでる女中に
あるに
其此捍
の分と
してそれ

つぎ女中ふつきそひくる
此捍こまをうちわれてあるへいり
ことをあづめて局の此捍を
こしらけつれきたりていふくの
どろまあをたるきあぞ
まるうちふ局の
此捍いこしふ
澄札さんあきを
ひつけてあれを
着へとりふゆらんと
生此捍ふつらま平川
此門を出きたりしふ
あるこふ立てるのぞり
の風ふあびくをうんて
ふと心ふぶふいあまある
のぞりハ京都よりきた
りし乾坤堂どうんとと
ゆふ易者しやきふて見まで
此頭屋の女中の身の上又ハ
うせものあるぞたびくみてのよひ

※さいこひふ身の上をこのこ
けまバ易者本筮ぜんを
立てそれをつくぐと
うんぐんて「今きぞんの
▲

身の上ふ何しハまてくる此あきこをものふ
ことくてたんぐんままバ百葉の宝を
つまくるふ口ぐこまとくむらひ
きたりしおうらひきまほとありし

☒つきそひきたりて
展ふのとしの男子の
身の上をうんて
めらひしとき
ふもまた易
ありしぐ
此易を
ひる人の
身の上
の
つま
りハ
吉あるう
凶あるう
そこを
あんりよあく
きうせてこ為へ
「さまバ百万
の宝とゆぞ



しふよくあたりしゆへまづつらぐ身の上を
ひたてもらんと生長ふて易者の家へ
ゆんとしけれバさきふいきたりをしふる
此捍入口のとしらけふいはむりをして
ゆるをひるよりきてれをうつらしと
うこつこのものうげふ身をうくしていふる
うちまもあく女中ふつきそひて出ゆくを
ひんままし此易者とハひどうこころ
ゆまけれバあんあいもせず
ざしきへてひんれバ
外ふ人もあきを※

上ふ北風たげしくふいてたるうの
あきへあづまさりしをひんてきを
あせり心をこるしめてこれを
ふ元へちうづけんとする易ありと
あわしけれバ「それハふし死あ
ことうあ我此春夏女中ふ取

凶とままども天地
の呼吸きうハあぞ
くもとぐまるのの
あられバ今ふも
上波ふ何のとき
いこれバつまよう
のとめずして
生宝しぜんふ
ほうふ入バ此
易ハ大吉あ
り北風ハ女
ふることまで
バ

つぎへ

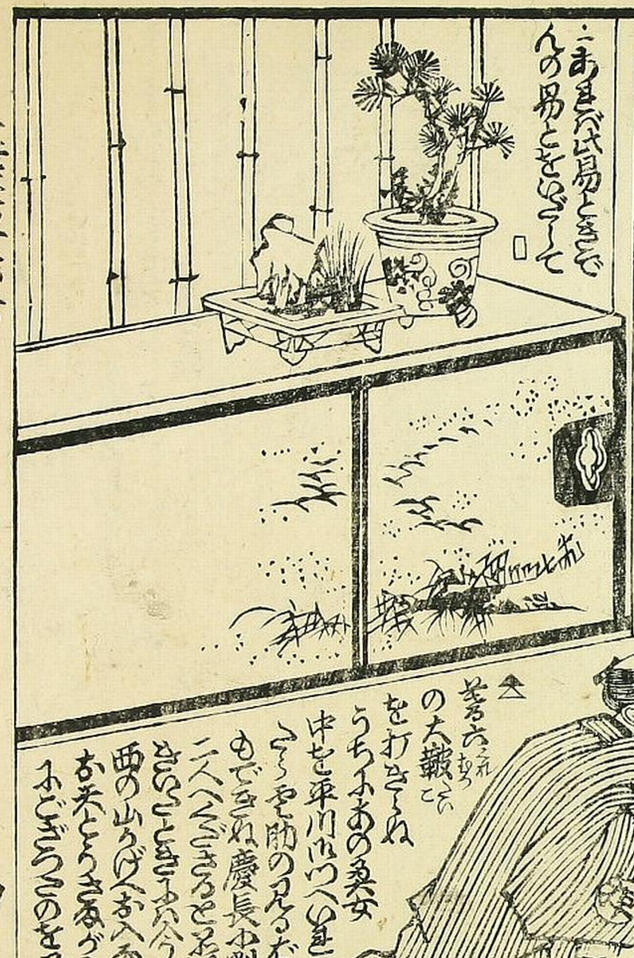
周易
乾坤堂
用水
千川町
乾坤堂

つぎ 八月七日の夜八つ半ごろ
男の上へあがるべし
女のこゝろざすべき
ところをさとす
△用心せられよ
さとゝはれば
[illegible]

◇糸川をさしのぞき
やつこうをおてんとう
さまとおがみ
うちこれこそ
とへきこえ
うちそめ
あいつらなれ
せうく宝の山へ
入あぐら
をかゝる
しくのどる
ことゝ
あひゝふ
どうやうろう
やつこぎ
つゝこゑ
はまどの
下より
んでおとの
うごきをまち

□ゆれを
とることいれば
ほまんさぞんの
うごきをとゝろと
せどゝ有り
うつりしとき
ぬぎすてのまどの
そとこそ
うつりしとき
ゝそこゑんとぞう
ぐさくのとゝろへ
ひめんでハ
おそろしひめんでハ

◐さてまた
その男子の身の上ハ
吉ありしら出ありしう



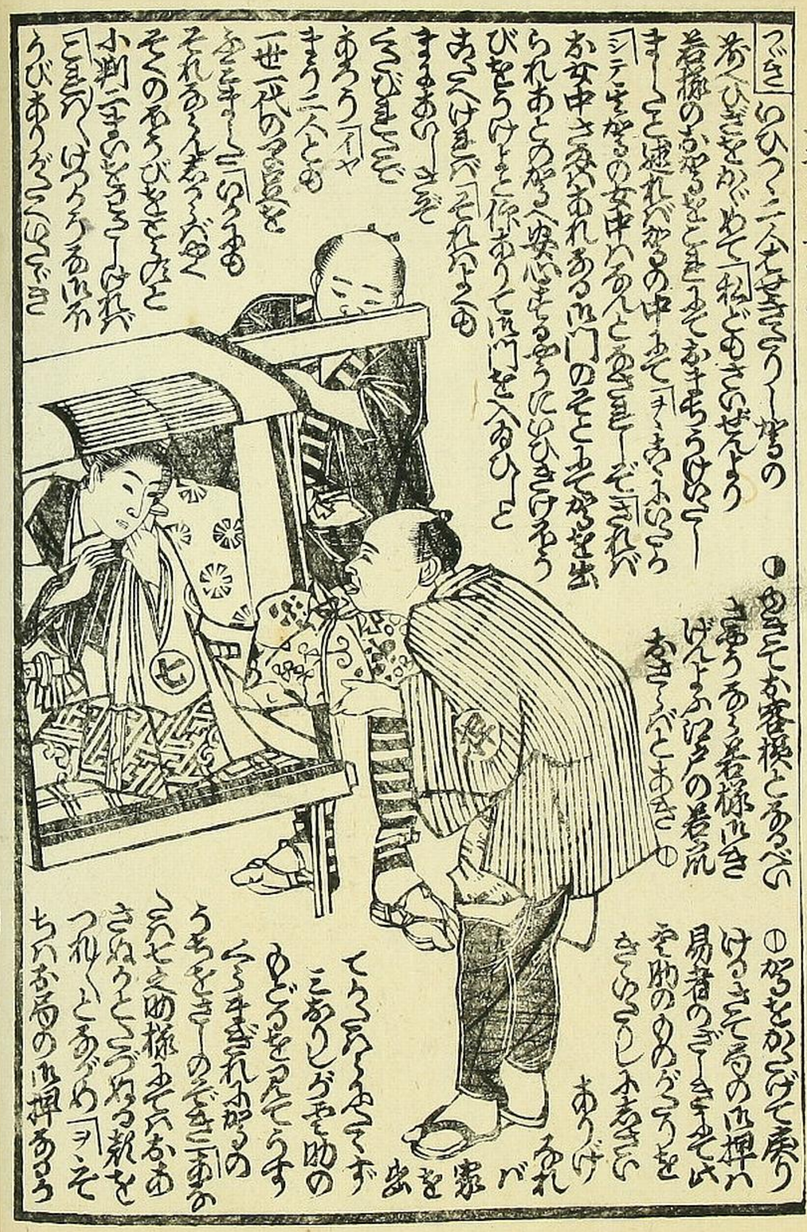
一さて八月の表ハ六吉
あれどもはゝ大吉ハ九月ろうの
晦日あるところ

□あまた八月ときゝて
人の男とをいざなひて

◇あるうさぎ城の本
若衆これ
の大鞍こ
をおさえ
うちよりあの女
中を平川はつへ
ゝそこ
もでこれ慶長小判を
二人くさるとお川で
きゝとゝきゝハ
西の山うぐいす
お夫とうさぎ山の上
よござうさのをまて◇

うけあう
びの
小判よ
あり
つき
手秋朱
のまひ
あさ
をお川
まてまう
ゝすべ
まうあと
のうごも
うとう
ごゃア
ゝきこ
ぞと

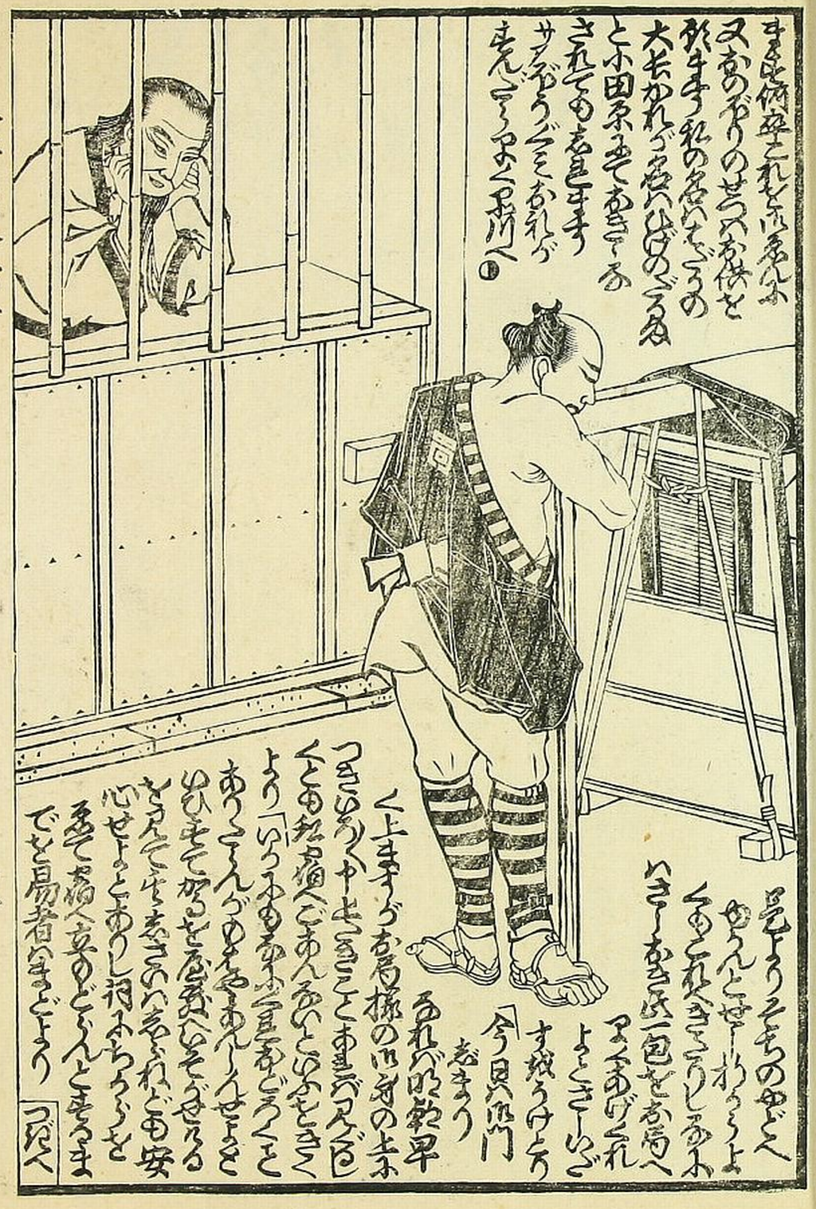
つゞく



つゞき いひつゝ二人をせきたりしなるの
あくひぎをかゞめて一私どもさいぜんより
若様のおなるをとまるにておまちうけいたし
ましたと述れバなるの中にて「ヲヽあゝにいたら
「シテ生なるの女中ハあんとあさましぞ」「それバ
お女中さまハあれあるに門のそとにてなるを出
られあとのなるへ安心するやうにいひきけるう
びをうけよと仰ありて門を入るひ」と
あゝへけまバ「それハよくも
まゝあいしさぞ
くるびましたぞ
あろう「イヤ
まう二人とも
一世一代のつ宮を
あさましたこいつらも
それあるんあるゝバなく
そくのあうびをとゝ
小判にまいをうたしけれバ
「これハ」けつろうあれバ
うびありがたくいたゞき

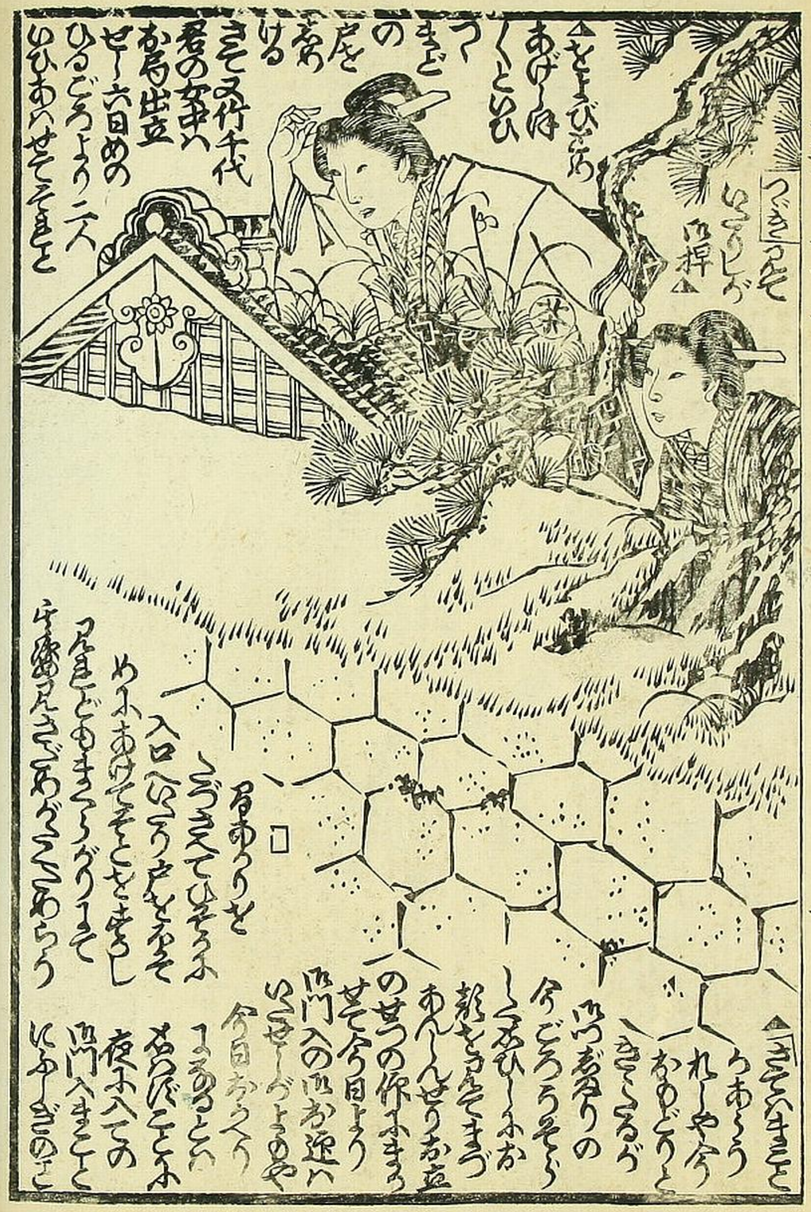
◎ゆきてお客様とあるべい
きあうあゝ若様にき
げんよふ江戸の若気
おさゝバとあさ◎

◎なるをかゝげて戻り
けるさて局の出押ハ
易者のぎしきにて此
雲助のものがたりを
きゝたりしにあさい
ありげ
あれバ
家を出
てうたゝふたてず
こありしが雲助の
のどるをみてうす
くらまぎれになるの
うちをさしのぞきこあな
こハ七之助様にて六おあ
さぬうとこづめる気を
つれ〳〵とあゞめ「ヲ」そ
ちハお局の出押あるう



まるに何卒これをに居れに
又おのゞりのせつハお供を
致ます私の名ハたゞうの
大长かれゞ名ハひげのごろ
とに田原にてあきてあ
されても志まます
サンぞうゞこおれゞ
まんゞこゝつよく平川へ◎

見ようそちのゆゞく
ゆうんとせしわうらよ
くもこれへきたりしあに
ハきしおき氏一包をお局へ
アくあげくれ
よくさしいぞ
す我うけとり
「今日ハ出門
志まり
あれバ明朝早
くに上ますがお局様の出身の上に
つきいろ〳〵中上ときことあまバみ〳〵
くとも私ハ痛くごあんあいとゆふをきく
より「いろにもあるに三ほどろくと
ありこゝんがのそもあんしんせよと
いひきてかるを居るいそがせる
をみてそこあさいハ志ゝれども安
心せよとありし羽にちうゝを
見て居へ立のどうんとするま
でを易者ハまどより
「つゞく



つぎつぎと
ひっきりしが
ひも拾ひ

▲をよびにたち
あげーはくとのひ
つまとの
の戸を
あける

きそ久竹千代
君の女中へ
お局出立
ぜー六日めの
ひるごろより二人
のひあへせそまと

▲きそ久竹千代
うあゝう
れーやう
おのどりと
きそくるゞ

四つ前ぶりの
今ごろうそう
しくひしーふか
起をきそまづ
あんしんせりお迎
の世つの作ふまう
せそ今日より
四門への四お迎へ
いせーづよのや
今日おうくう
このうとこ
ろの戸とお
夜ふへての
四門へまこと
にふーぎのこ

□

□あうりを
つぎえてひそろふ
入口へうそんをそそ
めふあけそこをまもし
つまごともまこうぐうこそ
午後ふたさごろあらう

ふくも女中ものこれときつつえ
ゆうづう
ちうふをへ旅つれのをひて
よふふの作
きそくるをへ
女中をまつうて四とろろう」とをこれへ

つづき ひるごろ
ゐ屋ごんを下り
そこそこうろつき
をそこてゐそ
糸瀬をきこと
りしかまり
大名屋のつう
うろうろさき
ゆふぐれを
つこうりてあ
ごろ山のうち
ひぐ六日めの
今日平川へ行
しころいや
夢と時をまぎ
れどもあすこそ
今日のうちよ
及へいくと山やまのりうそてをのそぐ平川
きびくれ六ツのおと鐘をきかぬ内やうやく
どもこれ六ツのおと切ゐ門へ入とのこれ

●うはけもの

今及ゐ六人ゆき六ゐまさし
今ごろはふんぎる井仙のこもち
ばこのひしーのあんころもおゐめ
ころころくいまこしもあくおゐく人
そしてそれごろ月のうち日ことうろ
これのどころうろうろもちやごりころれ

春日局

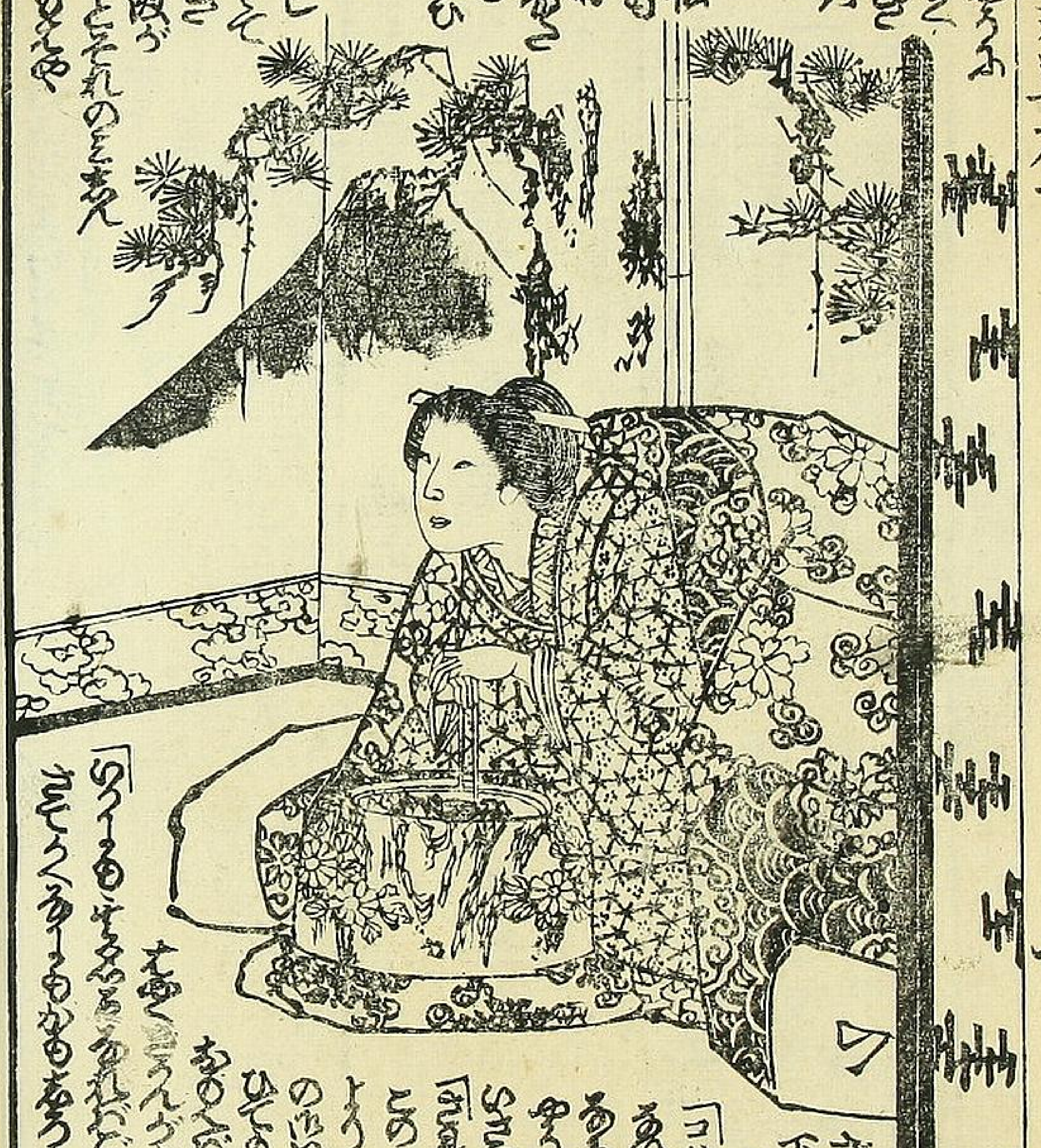
ふうつゐそ六切ゐ門へいろう
ちうぐゐの出日をこゐちうぐゐ夜人の
生出日をこゐちうぐゐ夜人の
那ろうて年きれれそ及れれ
どもよろしとと
ゆの那ぐをきく
生ごとうとうるぐ
しごうまとう
お庭番お夜日を
あーとゐる那をの
入ばきてきこりしへ
ゆろうろうのごと
ありせ二人の
女中の出局とそ
かきけそごろうの

一ゆの那これをおろうちごとを

△ま年せそんぶのことを
ろうしてくおきうせまう
せごとよのことろへ
ゆ前くよろしく
おこのことまう
もとつげ女へ
「それへさぞ
ゆろうぎ
ゆのき
れーとを
あんご

△

つぎ又はあうふ
まつらうよく
お歳りきき
るとは云ふ
仏のごとく
あおくをを
まもる神仏
の御ゆゑも
あらん信者
よりつあるさ
の御門跡を
流香様へいひ
あげしが
ふくべごせん
さくあるよし
を今日きてて
めつらしいどき
お部屋へ御殿が
きてもまゐるとそれのことまへ
おいせーづつゑや



ねくうひ
けふかし
とあひ
ざうをを
下へつき
ゆへ
「コハめづらし
あのとことへ
あまゆくいさ
やうあるとお
いさつその気が
「まづいへそれ
このごびさんふ
よりおもづく様
の御相そいて
ひそかどりしと
あのへはよ御相を
さきうんぶさんあり
「かうるもさかんしそれなどのつとも
さそくまゝもかもあるつゆまう

それは安心あり
私あるこの
おろそのうちふかりしとときすさしく
あ日枕ふきる一そのいそれへ御日ど
らんおのれるまづ今夜あるくと
おまをを為されておこさびれ夜
ねさそるへとひそひつて立上れ前ふ
きそうし女中もお側よつてひてとあひと
生をつげられけるさるなど
ふ生ぞよく気さるいを安、
あまてふところもちを
あつくるかいのふ
とそうく気まのやし
つひ今気は操よう
上さる一色をのそつきされへ
そさをいんのむてさそれせし御心
つづうようきてうぜーとて安心せそれ
ゆゑくをあそるやらへ御所よりのくでさし
御うろしきさうづきくて御前へ出なるさ気を
是お気ほんあるようとそふようとびのひて ㊂

へ私とれはそ御前をめでりくお
をあおむてそんぶへおゆむむきまーる
をつきまびそういかぞ
とへおいけれのとそう
うぞの気がへゑる
めのぞろへ気れバ
此ちぞさきまる
るめのへされあ
りとあひこ
ちそうらバ
守人の
名を
さし
て
大江所
へ

㊂「これハく
よくそあのど
うしぞうぶ方のことまか
つきまそれのいづくし ㊇

つぎへ

つぎ」うつくしきおんなをれば
おのれどもそれもそのもの
ゆき月みさかりごともおゝくとつぐ
者のあやまりにて一命を
あげうち殺を金鉄のごとく
思ひやとんどは両成敗とくの
けいさもありしが去年
市家の大名をはゞかりべつありしと
つたへて近日ゆるされとありしかば
今の様子にてはまだ戻りし
ありもせぬ事にて
ありまいぞ
ありしを代

◎賢士けんとよむろく寺井大炊助利勝分り是をきく心おごりの事ねがひ河の出前へもこゝにて先日竹千代君より永井信濃守へ御渡中よりねまとのさゝやとてさゝろ
ゆーあれのよおつて
仰さるゝとありしますそ
今のつて私ごも
ござまもあ
きう奥表
のむとれのと

◎私と高倉八是よりうるまの
うちのお旦那を
さうあくいふ
あぶらつぼ
ゆくとニ人の前
をさゞろとへ

べつありうれしや
うぐうん
せのゆゝで
きのゝとれば
ゆゝのゝまゝ
ゝとのゝまゝ
よもゆゝうれし
きゝべゆゝへる
ゆゝう
ゆゝ

竹千代君

◆つぎの
ゆ内祝と
奥表を
とりもし
けるを老ゆの
中ゆて寛仁行んの◎

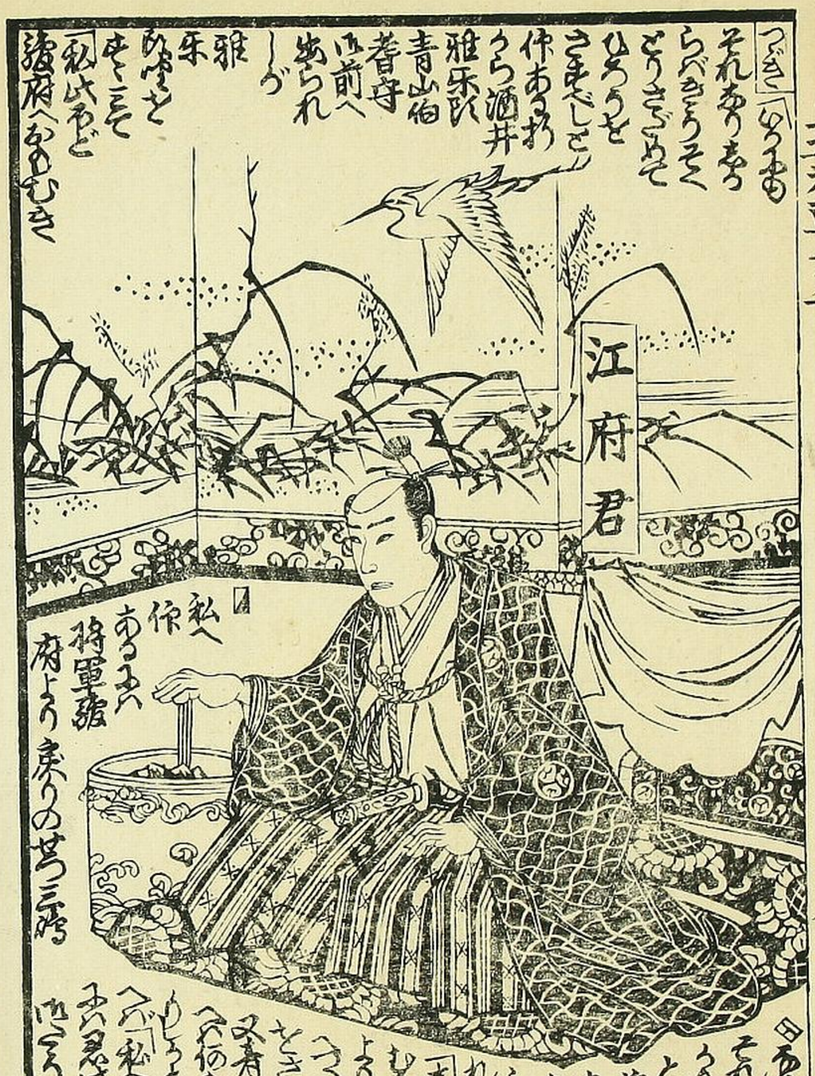
ありけるを
ゆゝうけるる
◎ゝそゝ玉千
代ゆのゆ前
ゆゝて
ゆふるまゝ
ありしを
ゆ代

りさゝもきゝ
てきれんを
しゆうぼる
者もあり
てゆ家
のゝろよ
ろしう
ねがひの
卒ゝとゝ
ゆく
着ゆ
のゆひろ
ゆあ
りゝ
しと
のべ
れの

つぎ

つづき
それあり
らべきうそ
どうさぎ
ひろうを
さまべしざ
仲あるお
うら酒井
雅楽氏
青山伯
着寺
ば前へ
出られ
しゃ

雅楽
あるさ
きこそ
私共も
領府へなむむき



㊐それときそ
うんーんせう
と領府の
前かひ
あげーれ
よとゐうり
しこ通ら
れけるべ

あるべきを
むりと云方
より土井氏
つうて安心
さきされよ
又青山忠俊さ
へ仲人あり
もうこう云わ
へば「私のおさ
又是非実領府
ばこうううの

㊐若年の九起居をうろぐひ
けれべことさられよう
こびのあるり
系もあり
牧の原へ
き月ばなんのーごござろと
こう大雪ふ
てそれへ九合
ふるりしの来月
下旬江戸へ下り
のせう磨時の
ばやそこあり
てれひとえをとぐ
さるさらあらうて

吸物のおこしの魚を
とうる者とおのき刑罪さい
ふおこるべきもし
やーを井上
主什

つれくとかぐ
さあうれ
んとそ
大雪来
一の
人気
なふ
をと

㊐
めうそ
ありむけしよ色い
つもるごうあつ
うひーりちぎ

万亭應賀作

つゞき 我なぞのうけ此を[illegible]ておゝぶつのおかへあかいゝかざろうとて又ちおうろくさまをる 女を江戸へおそてんとおもひしと沢山ぶづつ[illegible]ひしてのうけてくれ 見く ゞとしらぬもの[illegible]きめのと伝られしさつげれ 見ればイヤ老君ハ虚ろをあつて人の心をつりぬとまことをよく おさまとは老君も[illegible]とて天ン老君のおぞき ものつりなりふらると四をあく と申しもとむらることである べしと義し[illegible]ハ執政本多 佐渡守をもつて大阪表月江戸へ 下向あさるむ[illegible]と酒井青山 よりきこうなりきように 下向せられてちくじん又 そもそれバ先例にかまう 世にある中へ小田原まての 出迎をせバ中へわかわ 小田原まで出迎あるべしと迷ろを大炊 頭よれで[illegible]の中下向 あれハ小田原までの出迎と致つ[illegible]

○扨しとまとさ[illegible]別をて[illegible] より馬上にて出立せられし[illegible]の諸 役所儀より用[illegible]ぞわきうとうける

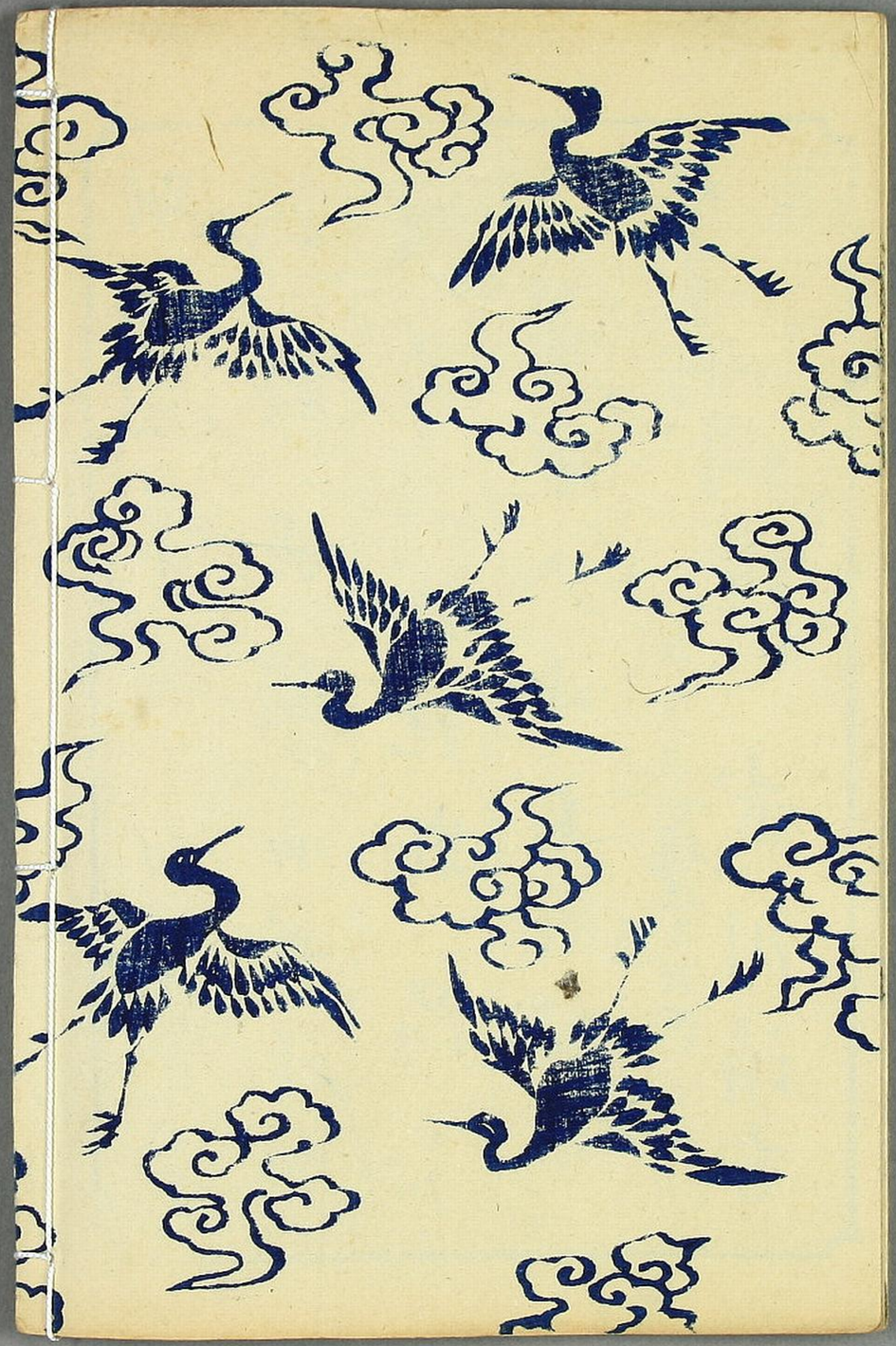
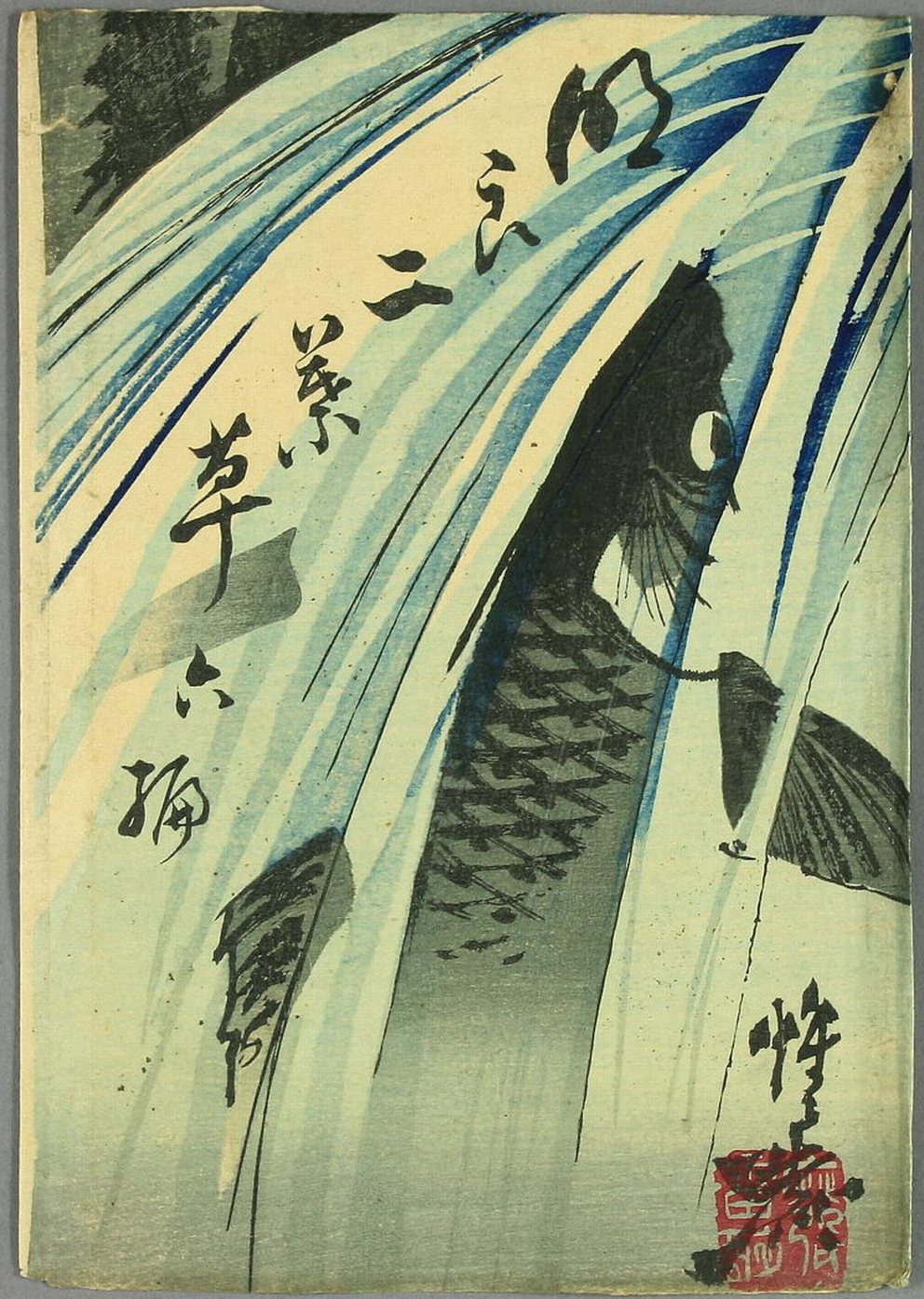
○六編七編の出板 一 近日に残らず 猶その[illegible] 板元 敬白

明良二葉艸 初編より追々出板

朝鮮異聞 四冊續切

繪本一代記物 品々

上等色入小本 品々

地本錦繪
團扇
問屋
東京日本橋区本銀町二丁目角
武川清吉

010190515589